平成 16 年度卒業論文

# 「レイラ・ザナにみるトルコのクルド人」

学籍番号：８５０１０６１
南・西アジア課程　トルコ語専攻
鴨下　明子

はじめに ..... 2

第１章　レイラ・ザナについて　―国会議員になるまで―..... 3

第２章　　DEP 裁判..... 5

１　DEP 裁判..... 5
２　宣誓式事件 ..... 8

第３章　解放までの過程 ..... 10

１　2004 年 1 月～4 月まで ..... 11
２　4 月 21 日以降 ..... 14

第４章　レイラ・ザナ解放―トルコの見方―..... 18

１　政府関係者の反応..... 19
２　コラムに見るトルコの意見 ..... 22

終わりに ..... 25

参考文献 ..... 27

## はじめに

トルコは長年、トルコ共和国にはトルコ人しか存在しないという公式見解を固持してきた。政府の見解によるとクルド語は辺境地域の方言でありトルコに暮らすクルド人は「山岳トルコ人」であった[1]。しかし近年トルコはEU加盟に向けて改革を加速する中、クルド問題の現実を認めざるを得なくなっている。本稿では2004年6月、10年間の獄中生活を経て解放されたクルド人元国会議員レイラ・ザナに焦点を当て、現代トルコ社会におけるクルド人問題と、その展開を明らかにしていく。

レイラ・ザナは武力闘争によらずにクルド人の存在を主張した人物として注目される。彼女が逮捕・投獄された過程を追っていくことは、トルコのクルド人問題を浮き彫りにすることであり、彼女が解放される過程を明らかにすることは、トルコにおけるクルド人の現在を把握することでもある。

本稿では一章でレイラ・ザナの経歴について出生から国会議員になるまでを明らかにする。その際、ウェブサイト［http://www.chris-kutschera.com/］から、レイラ・ザナについてのインタビュー記事と、レイラ・ザナの著書 *Writings from Prison*,Blue Crane Books,Cambridge,1999を参考とする。ウェブサイトの記事については、雑誌 *The Middle East Magazine*、October、1993 に掲載されたものを、インタビュアーである Chiris Kutschera が本人のウェブサイトに載せたものである。

2 章では『クルド人とクルディスタン－拒絶される民族－』とヨーロッパ人権裁判所の判決書などからレイラ・ザナが投獄されるまでの経過を、3章で主にトルコの日刊紙Milliyetでの EU関係者やトルコ政府の発言を追って、解放にいたるまでの背景を明らかにする。

4 章では Milliyet 紙からトルコ政府の発言、コラムなどを取り上げ、レイラ・ザナの解放に対するトルコの視点を考察する。

---

[1] Koray Düzgören,"Türkiyenin Kürt sorunu",*Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi/ Yüzyıl Biterken Cilt 13*, İletişim Yayınlar, İstanbul, 1995. p.845.

## 第１章 レイラ・ザナについて

レイラ・ザナは 1961 年 5 月、トルコ南東部ディヤルバクル近郊の村で生まれた。彼女の父は配水当局の労働者であり、5 人の娘と 1 人の息子の 6 人兄弟の父親であった。彼女は幼いころ小学校に通っていたが、父親は因習的、保守的な人物であったため途中で中退させられた。そして 14 歳のとき、35 歳になる従兄弟、メフディ・ザナと結婚する。この結婚も父親が決定したものである。メフディ・ザナは洋服の仕立て屋である一方、当時はトルコ共産党員として活動しており 1971 年から三年間の獄中生活を経験したあとでのレイラとの結婚になる。結婚後、二人はディヤルバクルに移動し、1976 年には息子のルーニーが誕生している。1977 年にはメフディ・ザナがディヤルバクル市長に選出された[2]。

そして 1980 年、メフディ・ザナは 35 年間の禁固刑判決を受けた。当時、レイラ・ザナは彼らの娘であるルケンを身ごもっていたが、メフディ・ザナはその後 10 年間を獄中で過ごすことになる。レイラ・ザナはメフディ逮捕後の数年間は彼が各地の刑務所を点々とする中、彼を追ってディヤルバクルからアイドゥンへ、アフヨンからエスキシェヒルへと移動を続けてメフディ・ザナの支援を続けている。彼女はこの過程でメフディの励ましもあり、独学で勉強を続けて学校に通わずに高校の卒業資格を取得した[3]。

また彼女はメフディ支援を続ける際、増え続ける受刑者の家族の中で sporks person となり、彼らのリーダーとしての役割も勤めるようにもなった。1980 年代、彼女は女性の人権運動などを活発に行い、女性グループを組織し、そのグループはイスタンブルとディヤルバクルに事務所を開いた。彼女は Human Rights Association のディヤルバクル事務所で働き、“Yeni Ülke”紙の通信員もしていた。後にはここで編集につくこととなる。“Yeni Ülke”はクルド人問題を集中的に扱う新聞として大きな注目を集めた新聞であり、政府、軍は「PKK のマウスピース」だとして発禁押収処分、記者や編集者の逮捕を繰り返していた[4]。

メフディ・ザナが投獄されるまでは彼女は自分自身をトルコ人として自覚していたが、この時期の経験を通じてクルド人としてのアイデンティティーを意識するようになったと語っている。同時期に彼女はメフディの意向もあり、学校に通わずに独学で高校の卒業資格を取得している。どのようにして彼女がクルド人としての意識を持ち始めたか、インタビューで次のように答えている。

> 私は当初それを個人的なものだと考えていたが、メフディと彼の友人たちは、投獄されてから拷問を受けていた。私は政治的な本を読み始めた。すべての単語を理解していたわけではなかったが・・・。6 ヶ月もの間、

---

[2] Leyla Zana へのインタビュー ［http://www.chris-kutschera.com/A/leyla_zana.htm］

[3] Leyla Zana, *Writings from Prison*,Blue Crane Books,Cambridge, 1999 p. 14（以下 Leyla Zana）

[4]中川喜与志 『クルド人とクルディスタン』,南方新社, 2001 年 （以下、中川）

私はメフディに会うことを許可されなかったが、その間に彼は拷問を受けていたのだ。私はただ'No Visit'と言われるためだけに、毎週刑務所に通ったものだった。

また、'政治的な本'については、次のように語っている。

記憶している限り一番最初に読んだのは、'The Partisan`s Daughter'だ。当時私のトルコ語能力は十分ではなく、すべてを理解できたわけではなかった。次には'The Red Stone'、これは中国共産党の歴史の本だ。そこでは体制に反対する共産党の話が書かれており、ファシストと獄中のヒーローが存在した。私はその状況をわれわれクルド人の状況と置き換えてみた。そして 1984 年までには私は、政治活動に参加し始め、刑務所の前でさまざまなデモやストライキを行うようになった。

そして 1988 年、レイラ･ザナは逮捕され、七日間拘留された後、５０日間実際に獄中生活を送った。逮捕当日、彼女は当時いつもしていたようにメフディに会いに行っていた。メフディが投獄されていた刑務所の前には、彼女と同じように家族を投獄されているクルド人たち、多くは女性であり子供や老人がおり家族との面会を許されないまま待たされていた。

そこで彼らは壁の向こうから、自分たちが会いにきている家族が鞭打たれる声を聞き、これに抗議するため兵士に対して投石するなどの暴動を起こした。このときレイラ・ザナは他の 83 人とともに逮捕された。兵士から銃を奪おうとし集団を扇動したという罪で、7 日間の拘留の後に、50 日間の獄中生活を送った[5]。

こうして 1980 年代を通して彼女はクルド人としての自覚を持ち始め、政治的な活動を行うようになり、最終的にこのような活動は彼女の 1991 年の国会議員選挙立候補へとつながった。1991 年 10 月、普通選挙で 22 人の HEP(Halkın Emek Partisi)の党員が SHP(Sosyal Demokrat Halkçı Parti)の候補として選出されたが、彼らはクルド人としてのアイデンティティーを主張しながら初めて国会議員となった[6]。レイラ・ザナはそのなかでもトルコ大国民議会にクルド人女性国会議員として選出された初めての人物である。彼女は非常に人気のある議員であり、選挙区ディヤルバクルで 84%の票を獲得している[7]。

---

[5] Leyla Zana へのインタビュー。

[6] Kemal Kirişçi and Gareth M. Winrow,*Kürt Sorunu Kökeni ve Girişimi*,Tarih Vakıfı Yurt Yayınları,İstanbul, 1997, P. 142 （以下 Kirişçi）

[7] Leyla Zana, op.cit. p. 14

以上、ここではレイラ・ザナが誕生してから国会議員に選出されるまでの経歴を見てきた。彼女自身、議員になる前から投獄を経験しており、取り締まられてもなお維持し続けた彼女のクルド人アイデンティティーに対する強い献身を見ることができる。この章では以上のような経歴を明らかにし、クルド人アイデンティティーを掲げる、クルド人の代表として彼女を定義する。

彼女の夫、メフディ・ザナはブリュッセルに亡命していたが、レイラ・ザナが解放され 2004 年 10 月、欧州でサハロフ賞を受け取った後にトルコへ帰国する際、彼らの娘 Roken と 10 年ぶりに一緒に戻ってきた。“テロリストのメンバー、及びテロリストへの援助”の容疑がかけられているメフディ・ザナは 10 月 16 日、帰国と同時に空港で逮捕された。彼は容疑を否定しており、自由な状態で裁判を受けるために 17 日には解放されたが、彼の裁判も今なお進行中である。

## 第２章　DEP 裁判

### １　　DEP 裁判

次にレイラ・ザナの議員としての活動を停止させられるまでの経過を見てみたい。1991 年 10 月にレイラ・ザナたち 22 人の HEP 党員が SHP のリストにおいて国会議員となるが、それ以前にもトルコの国会においてクルド系（Kürt Kökenli）国会議員はいつでも存在した。しかし、このグループは初めてクルド人としてのアイデンティティーを主張しながら、クルド問題というテーマを国会に持ち込んだ。1991 年 11 月当初、SHP と DYP（Doğru Yol Partisi）の連立政府が掲げていた議定書は一連のリベラルな改革を約束していた。議定書はクルド問題には直接触れていないが、トルコには独自のアイデンティティーを認めるべき異なる民族が存在することを述べていた。そしてこれがトルコ国家の統一性を弱めないというようなことを言っていた。これは部分的には、1991 年 11 月の選挙以前に SHP が HEP と結んだ同盟の産物だ。この同盟は南東部での支持増加により SHP の選挙実績を拡大し、HEP 党員の国会入りを実現した[8]。

1991 年 11 月 6 日、国会で議員就任の宣誓式が行われた。このときレイラ・ザナたちは宣誓でもクルド人アイデンティティーを主張し、大きな問題となった。クルド人であることを主張したがために、後には彼女の議員特権は停止されたのである。1994 年に彼女が投獄されるまでの過程は次のようである。

経過

[8] Kirişçi,op.cit. p. 142

1994 年 3 月 2 日、レイラ・ザナを含む DEP（Demokrasi Partisi）[9]の国会議員が議員特権が停止される。
1994 年 3 月 4 日、レイラ・ザナは刑務所に送られる。
1994 年 3 月 16 日、未決勾留が決定される。
1994 年 6 月 21 日、アンカラ国家治安法廷の検察官が刑法 125 条[10]に基づき起訴状を提出した。
1994 年 12 月 8 日、トルコ刑法 168 条 2 項[11]において 15 年の懲役が決定される。

以上のようにして、彼女は刑務所に入ることとなった。彼らの投獄は、選挙を見越した時の首相タンス・チルレルが、民族主義的な支持層から票を獲得するために行われたという意見もある。“国会の屋根の下に守られている PKK（Kurdistan İşçi Partisi）に手入れをするときがきた。”というチルレルの宣言とともに始まった流れはレイラ・ザナたちの不逮捕特権停止、投獄という形で決着する[12]。レイラ・ザナたちに有罪判決を下した裁判は新聞紙上などで DEP 裁判と呼ばれ、その裁判の方法などについてトルコは多くの批判にさらされることになる。彼女の行動が、どのように裁判され、どのような法に触れたのか。

まず 1994 年 6 月 21 日に、アンカラ国家治安法廷の検察官によって、起訴状案が提出されたが、これは刑法 125 条、国家の一体性に対する反逆—死刑に相当する刑—に基づくものであった。起訴状は第一にレイラ・ザナが PKK の活動に従事していたとされる事実（兵士をかくまう行為、そのうちの何人かに医療を提供する、地域のリーダーと交渉するまたは彼らに PKK に対する援助を強要する）、そして第二に、会話または文章における被告らの PKK に対する

---

[9] 1993 年、HEP は閉鎖され後継政党である ÖZDEP が作られたがこれもすぐに閉鎖された。このためレイラ・ザナたちは逮捕当時、HEP の流れを汲む DEP（Demokrasi Partisi）に所属していた。

[10] トルコ刑法 125 条「国家あるいは国家の一部を外国による占領にさらす、国家の独立を損なう、その統一性を壊す、あるいは国家の支配から国家の領土の一部を分離することを目的としたどんな行為も、死によって懲罰可能な犯罪であるものとみなす。」

[11] トルコ刑法 168 条「第 125 条の中で定義された犯罪を犯すことを意図して・・・、武装集団、武装組織を形成するか、またはリーダーシップをとるか…あるいはそのような集団か組織を指揮する、あるいはその中で特別な責任を負うものは、これらの人は最低 15 年の懲役を宣告されることとする。」「集団か組織の他のメンバーには、最低 5 年最高 15 年の懲役が宣告されるものとする。」

[12] Aram Nigogosian,“Turkey`s Kurdish Problem in 1990s:Recent Trends”,*Kurdish Nationalist Movement in the 1990s:Its Impact on Turkey and the Middle East*, The University Press of Kentucky,Kentucky,1996 ,p.40

援助の表現に基づいていた[13]。1994 年 6 月 21 日の夜に、彼女が告訴されたことは、TRT 1 のニュース速報の中で発表された。起訴状の中身の一部は次のようなものである。

「憲法 82 条で定められた就任の宣誓を行うとき、伝えられたところによると議員たちはクルドの色である“黄色、緑、赤”のハンカチを上着のポケットに身に着けており、Leyla Zana については同色のヘッドバンドをつけていた。赤、黄色、緑は PKK の旗の色をしている。こうした方法で一致して行動することにより、被告たちは、トルコ大国民議会に PKK の旗を持ち込む陰謀を企てた。」[14]

「彼らは宣誓に先立って、また宣誓式の後の記者会見でも、“圧力を受けて宣誓を行ったこと”を話している。宣誓のあとで Leyla Zana はトルコ語で“私はクルド人である。今後も永遠にクルド人であり続けるだろう。私はこの宣誓を強制的な圧力の下で行っている。しかし私はクルド人であり、今後もそうあり続ける。”と述べた。」

「彼らは宣誓式の後で議長に提出した経歴に、“話すことができる外国語”の欄にトルコ語と書いて提出した。」[15]

そして 1994 年 12 月 8 日、国家治安法廷はレイラ・ザナを含む 4 人の元 DEP 議員に、トルコの刑法 168 条2項にある、武装集団への所属の罪で 15 年の懲役を宣告した。

このようにしてレイラ・ザナは、武装集団のメンバーとして刑務所に送られることになったが、この裁判は人権団体などから多くの批判を呼んだ。特に宣誓式の時の出来事が起訴状に挙げられ、‘赤、黄色、緑’を身に着けたことが、判決の根拠のひとつとなったことは注目された[16]。このことについて彼女は、‘赤、黄色、緑’はクルドの色であり、彼らを代表してそのアイデンティティーを主張するために同色を身に着けたことを説明しており、同色を PKK 色とは考えていないとしている[17]。

---

[13] ヨーロッパ人権裁判所［http://cmiskp.echr.coe.int/］より判決文,CASE OF SADAK AND OTHERS v. TURKEY

[14] 中川、前掲書、p. 115

[15] “Criminalizing parliamentary speech in Turkey / briefing by the International Human Rights Law Group ; before the Commission on Security and Cooperation in Europe.”, *implementation of the Helsinki accords*, Washington DC：The Commission,1994. アメリカ下院、ヨーロッパにおける安全保障と協力委員会の公聴会記録から、1994 年 5 月 1 日公聴会における法律家グループによるレポートを使用。(マイクロフィルム)

[16] Amnesty International[http://www.amnesty.org/],Report,EUR44/85/97,1997.

[17] 中川、前掲書、p. 125-126

では次にこの宣誓式での出来事、「宣誓式事件」について考えてみる。この事件はトルコのクルド人にとっての「国会議員という地位」そのものについて疑問を投げかけた事件であった。

## ２　宣誓式事件

トルコは長くクルド語での放送、演説等を認めていなかった。そのような中で、国会議員として、レイラ・ザナの選挙区であるディヤルバクルに住んでいるような人々、つまりクルド人たちの声を反映できたのだろうか。国会議員として選出されたということ、そこでクルド人の代表として発言するということは、トルコ国内にクルド人が存在するということが認められるということになる。PKK が武力闘争によってクルド人の存在を主張したのとは違い、レイラ・ザナは合法的にクルド人の代表としての意見を反映させようとした。PKK とトルコ軍が激しい衝突を繰り返していた時期に、レイラ・ザナは国会での就任宣誓を迎えることとなった。この宣誓式で議員は初めて国会に立つことになり、議員としての任務を認められる。

1982 年憲法の第 81 条にある宣誓とは次のようなものだ。「トルコ大国民議会の構成員はその仕事に就くとき、以下のように宣誓する。“国家の存在と独立、祖国と民族の不可分の統一性、無条件絶対の民族主権を擁護することを、社会の平和と繁栄、民族の団結と正義のもとですべての人が人権と基本的自由を享受するという理念から離れることなく、憲法に忠誠することを、私は、偉大なるトルコ民族の前で自らの名誉と誇りにかけて、宣誓します。”」

『多国間植民地＝クルディスタン』の著者イスマイル・ベシクチ氏は、この憲法および宣誓については次のように述べている。

> 憲法に出てくる、「国家の領土および民族との不可分の統一性」は、クルド人の民族的存在・民族的アイデンティティーをないものとし、否定する、最も典型的な表現スタイルのひとつである。さまざまな公民権や社会的諸権利は、ただトルコ人として、トルコ人化することによってのみ、つまりクルド人アイデンティティーを否定して初めて享受することができる、と説明しているのである。トルコではクルド人たちは自らのアイデンティティーを否定した後、どんなことでもできる。国会議員になることも可能だ。
>
> しかし、憲法のこれらの条文を前にして、「東部議員たち」がクルド人であると、どうして信じることができるだろうか？この条文を見れば、「国会議員という地位」そのものが、クルド人であることの否定、トルコ人で

あることの承認、トルコ民族主義宣伝の実践という要件に結びついていないだろうか？国会議員たちが行う宣誓の意味とはいったい何なのだろうか[18]？

まさにこの問いかけに答えるような形で、レイラ・ザナは著書の中で次のように語っている。

トルコの政治—軍事的政府は、私たち選挙によって選ばれたクルド人の代表に、公に自分たちのアイデンティティーを、私たちの民主的闘争の存在理由を放棄するようにと、そして私たちにそのシステムに忠実であるように、と言っている。その公の、テレビ放送がなされる誓約なしに、私たちの議会のメンバーとしての任務は正当であると確認されない。（これは）議員としての経歴の発生の時点から、私たちに仕掛けられた罠なのだ。

すべての人、特に私を選出した人々は‘クルドの情熱’（新聞で私はこのように書かれていた）が何をするのか見守っていた。私は圧倒的な責任を感じていた。私は屈服しないこと、私自身のアイデンティティーへの献身（commitment）を強調するために、クルド色のスカーフ（起訴状ではヘッドバンドと書かれている）を着用した。

宣誓式はテレビで生放送されていた。私はまず、静かに宣誓のトルコ語の文章、公式に（議員としての）任務を有効にするもの、を読んだ。そして次にクルド語とトルコ語で次のように付け加えた。「私は強要されて、先の形式的手続き（宣誓）を読んだ。私は民主主義の文脈のなかで、トルコ人とクルド人の兄弟のような共生のために戦うだろう。」この言葉は会場に集団的興奮状態を誘発した。

確かにトルコ共和国の歴史のなかで、議会であえてクルド語の文言を発音されたのは、初めてのことだった。そしてトルコの社会は私を救いがたい、打破すべき敵とみなした[19]。

このように彼女はクルド人としてのアイデンティティーを国会の場でも失わないでい

---

[18] イスマイル・ベシクチ(著) 中川喜与志、高田郁子(編訳) 『クルディスタン多国間植民地』 柘植書房 1994 （以下イスマイル）

[19] Leyla Zana, op.cit., pp. 2-3.

ようとした結果、“PKK のメンバーである”として有罪判決を受け、刑務所に送られることになった。

彼女が宣誓式でとった行動は当時のトルコでは「テロリストのメンバー」として判断されたのだ。このことを通してトルコの民主主義の疑問点が明らかになる。「トルコではみな平等である。言語・民族という点で差別されない。」という言葉があるように[20]、レイラ・ザナはクルド人でありながら国会議員として選出された。しかし、事件の起こった「宣誓式」は、クルド人として国会に立つこと、クルド人のアイデンティティを国会議員として訴えること、を否定させる儀式であった。

この章では、レイラ・ザナが国会議員としての不逮捕特権を剥奪され、刑務所に送られることになった過程を追ってきた。ここでは特に宣誓式事件から「トルコ人化を受け入れず、クルド人の民族的諸権利を守り続ける人は何にもなれない。このような人に残された可能性は（分離主義活動・国家反逆活動の）容疑者になること、囚人になることだ。」[21]というトルコの非民主的な現実が明らかになった。以上から、レイラ・ザナの投獄をトルコのクルド人が置かれている‘非民主的現実’の象徴と捉える。

## 第３章　解放までの過程

前章で見てきたような DEP 裁判は、注目を浴び批判の対象となった。1994 年 12 月に有罪判決を受けて以来、レイラ・ザナは数多くの国際的平和賞を受けてきた。1994 年にノルウェーから Raftos Prize for Human Rights, 1995 年にオーストリアから the Bruno Kreisky Peace Prize, 1995 年ドイツから the Aix-la-Chapelle International Peace Prize,1996 年デンマークから the Rose Prize, 1995 年のヨーロッパ議会からのサハロフ平和賞、また 1995 年にノーベル平和賞にも初めてノミネートされ、最終選考まで進んだ。彼女は 1998 年までにノーベル平和賞には三回ノミネートされている。このように数々の平和賞を与えられるとともに、アムネスティ等の国際的人権団体がレイラ・ザナ解放キャンペーンを行ってきた。

彼女がこれほど外国からの注目を集めた主な理由は、国外に向けてクルド問題を訴えるための活動を続けてきたからだろう。国外のメディアへトルコ南東部の様子を伝えたり、人権保護団体に働きかけたり[22]、ヨーロッパ政府関係者へも接触を試みたりといった活動を通して彼女は少しずつ存在感を増していった。こうして次第に国外でクルド問

[20] イスマイル、前掲書、p.56

[21] Leyla Zana, op.cit., p.28

[22] Leyla Zana, op.cit., p.5

題が注目を集めるに至ってトルコ政府は 1994 年、強硬手段を用いてレイラ・ザナの口を封じようとした。国会議員の不逮捕特権を停止して、彼女を刑務所に送り込もうとしたのだ。しかし、彼女が国会に立てこもり抵抗をした末に制圧、逮捕されたことで、反対に非常に注目され彼女はますます知名度を増した。これらのことが国外から様々な支援を受けることができた理由だと考えられる。2004 年 6 月 9 日、レイラ・ザナは三人の元 DEP 議員とともに刑務所から解放されたが、これは彼女が投獄されていることでトルコが絶え間なく非難にさらされてきたからである。トルコが、悲願である EU 加盟のための条件として、彼女の解放が必要と判断せざるを得ないまでに追い詰められたからである。

では実際どのような過程で彼女が解放されたのだろうか、この章ではレイラ・ザナが解放に至る経過を見てみたい。

1994 年に刑務所に送られた直後、EU 理事会がレポートでレイラ・ザナたちの解放を求める勧告を行った[23]のを始めとして様々な活動がなされてきたが、直接解放の原因となったのはヨーロッパ人権裁判所の決定だ。

| |
|---|
| 2001 年 7 月 17 日、ヨーロッパ人権裁判所は元ＤＥＰ議員が“公正な裁判をされていなかった”という決定を行った。<br>2002 年 4 月 30 日、ヨーロッパ委員会は元ＤＥＰ議員らに対して、ヨーロッパ人権裁判所の決定を執行するよう要求した。<br>2003 年 5 月 28 日：国家治安法廷は元ＤＥＰ議員の再審を決定した。<br>2004 年 4 月 21 日：国家治安法廷は元ＤＥＰ議員に対して 1994 年の判決を繰り返した。 |

2003 年 5 月にレイラ・ザナたちの再審が決定して以来、2004 年 4 月に国家治安法廷が最終的な判決を下すまで、EU の関係者たちは機会あるごとに彼女たちの解放を求めている。

### 1　2004 年 1 月～4 月まで

2004 年は前年からの再審理が続いている。まず 1 月から 4 月までの目立った発言を見ていくことにする。

1 月 16 日、レイラ・ザナたちの 10 回目の審理が行われた。この様子は欧州議員も傍聴しており、アンカラを訪問していた欧州委員会委員長ロマーノ・プロディは "ヨーロッパはこの裁判を、近くから追跡している。"と述べている。この日行われた審理でも、レイラ・ザナたち元 DEP 議員の解放は否決され、傍聴席にいた人々が抗議のための拍

[23] Kirişçi, op.cit., p.177

手を行い、これに対して治安法廷が一時扉を閉め切って抗議行動に出た関係者の名前を特定するという騒動も起きた[24]。

16 日の判決に対して、プロディ委員長は、

私は、彼らは解放されることを望んでいた。解放されなかったことを聞いて、ただただ残念だとしか言いようがない。他には何も言うことはない。本当に大変残念なことだ。

と語った[25]。

また 1 月 22 日、トルコを訪問していたドイツのフィッシャー外務大臣は、レイラ・ザナたちの裁判について、

トルコ—EU 間の肯定的な関係構築への助けとなるだろう。DEP 判決については EU の世論も非常に関心をもっており、この部分での前進は EU 加盟プロセスによい影響をあたえるだろう[26]。

と述べ、彼女たちの解放が EU 加盟に肯定的であるということを重ねて強調している。2 月は 21 日に 11 回目の審理が行われ、これにはトルコ—欧州議会共同国会委員会議長ヨースト・ラジェンディッキが参加した。20 日に外務大臣ギュルを訪問したラジェンディッキは、今回この裁判に参加するためにトルコへ来たことを伝え、

（ギュル外務大臣との）会談では何度もザナの問題について言及した。ザナの裁判が滞り、10 年間もの間投獄されていた彼らが解放されなければ、誰もトルコで改革が進んでいるとは思わないだろう。（裁判の判決は）もちろん政府が決定すべき事柄ではない。しかしすでに変化すべきときが来たのだ

と述べている[27]。また、この記者会見の翌日、今回の裁判でも解放は否決されたことを受けて次のようにコメントした。

ザナにはヨーロッパにとって象徴的な価値がある。トルコの裁判官、検察

---

[24] *Milliyet*,17/01/2004

[25] *Milliyet*,16/01/2004

[26] *Milliyet*,22/01/2004

[27] *Milliyet*,20/02/2004

はすでに正しい決定をしてもいい時期がきたと考えている[28]。

では 3 月の動きを見てみよう。まず 3 月 3 日に欧州議長パット・コックスが、トルコ大国民議会における演説の中で次のように話している。

> 次のことを言及したのは私が初めてだろう；あなた方は（トルコは）一共和国として、自らの領土の統一性を守る権利、義務がある。
> —法制度、政府、議会は自由だ。われわれはトルコの裁判官に干渉することは望んでいない。
> したがって裁判に関してトルコとわれわれの（EU の）関係へ、直接反映はしない。しかし DEP 裁判は、トルコ国外で象徴的な価値を持っている。このため私は今回あえてこの問題に触れた[29]。

このようにレイラ・ザナたちの裁判がトルコの非民主的側面の象徴であると示唆し、解放を要求した。そして 3 月 12 日、12 回目の審理が行われたが、この回からレイラ・ザナと元 DEP 議員たちは解放を拒否し続ける法務大臣チチェッキと法廷に抗議するために、審理に参加していない。この審理を欧州議員として傍聴していたイギリスの議員リチャード・バルフォアは, “彼らが有罪か無罪かは法的な問題だ。しかし 11 年間は EU にとっては十分な罪だ。”と述べている[30]。

3 月 17 日、EU のレポートが出る。この中で母語以外の言語での放送・出版解禁への期待を強調し、ザナらの裁判の過程も批判されている[31]。

4 月 2 日、13 回目の審理が行われた。この回はレイラ・ザナたちの弁護士とトルコ—欧州議会共同国会委員会議長ヨースト・ラジェンディッキと何人かの外国人の代表、DEP の関係者たちが参加した。ここでもレイラ・ザナたちの解放は認められなかった。

被告人弁護士のユースフ・アラタシュは、

> われわれの要求はすべて拒否された。彼らを解放しないのは法に反する。彼らの解放によってトルコが何を失うというのか？法的観点からどのような害になるのか？

---

[28] *Millliyet,*21/02/2004

[29] *Milliyet,*03/03/2004

[30] *Milliyet,*12/03/2004

[31] *Milliyet,*17/03/2004

と話し、トルコ—欧州議会共同国会委員会議長ヨースト・ラジェンディッキも、彼のこの言葉から、“法廷は公正な裁判を行わなかったことを確信した”ことを話している[32]。

以上のようにレイラ・ザナの裁判審理は 2004 年に入ってからも続いており、1月 16 日から 4 月2日までに、4 回の審理が行われた。そこで解放の要求が退けられるたびに EU から批判と再び要求が繰り返されている。しかし、度重なる批判にもかかわらず、トルコはまだこの段階でレイラ・ザナの解放に対して積極的に動いていない。

これは 1 月 12 日、ドイツの二つの新聞に対するエルドアン首相の次のようなコメント、

> 私は人権の観点からザナの状況に再び関心がもたれることに対してもちろん反対ではない。しかし彼らに対しては、私自身も詩を読んだがために投獄されたことは話してある。私のすべての権利は取り上げられた。そのとき EU はどこにいたのか[33]。

また 4 月 3 日に法務大臣チチェッキが、

> この状態は一部によって間違って説明されている。まるでヨーロッパ人権裁判所の決定にそって自動的に判決が下されるかのように考えられている。テーマは政治的な問題となった。ある種の期待がある。法廷は政治的期待にそった判決を下すわけではない[34]。

と発言していることなどに見ることができる。そして 4 月 21 日には、国家治安法廷は最終的に 1994 年の有罪判決を繰り返し、解放要求は否決された。

### ２　4 月 21 日以降

この判決に対して、レイラ・ザナたちは最高裁判所に控訴すること、そこでも解放の要求が否決されれば再びヨーロッパ人権裁判所に訴えることを伝えている。この 4 月 21 日の 14 回目の審理は、被告の関係者や外国人等も傍聴していたが彼らの裁判に対する反応は非常に厳しい。裁判を傍聴したヨーロッパ議会の関係者のうちイタリアの欧州議員ルイギ・ビンチは次のようにコメントした。

---

[32] *Milliyet,*02/04/2004

[33] *Milliyet,*12/01/2004

[34] *Milliyet,*22/04/2004

専制国家にあるようなこのような裁判は、ヒトラーのドイツでも見られた。トルコの裁判は自由ではない。これはEUに対する侮辱でもある。
—この恥ずべき法廷がトルコで廃止されることを望む。ファシズムの一部であるこの法廷が未だに存続している。われわれは政治犯に対して恩赦を望んでいる。法廷は被告が、ただ異なる言語で話しただけで 15 年間の有罪を決定した。この恥ずべき行為は世界中でトルコだけに存在するものだ。トルコは民主化すればEUに加盟できるだろう[35]。

このコメントは大きな話題となった。ヨーロッパにとってのレイラ・ザナは、平和と民主主義のために活動する、トルコのクルド人抑圧の犠牲者である。この判決はルイギ・ビンチ議員からだけでなく、EU 委員会からも非難された。

4 月 21 日ヨーロッパ議会とトルコ国会の間の仲介組織としての任務を務めているトルコ—欧州議会共同国会委員会議長ヨースト・ラジェンディッキも，“深く失望した”ことを明らかにしている[36]。

4 月 22 日ヨーロッパ議会においてトルコに対する勧告が承認された。そこでは
"DEP 裁判が、トルコで改革を妨げようとしている勢力によって利用された。"
“トルコ政府が法制に関して取り組み始めた改革に明らかに矛盾するのもである。”
といった形で判決が非難された。また、政治的思想のために服役しているすべての人に恩赦が与えられることを呼びかけている。

また同日、欧州委員会の拡大担当委員ギュンター・フェアホイゲンの広報官 クリストフ・フィロリも次のように述べた。

EU へ加盟申請しているトルコは思想と表現の自由に対して重要性を感じなければならない。ザナがまだ表現の自由の問題で刑務所にいるのは、コペンハーゲン基準を実行するのに認められる改革が必要だ[37]。

EUの議長国アイルランドによって行われた会見では、

レイラ・ザナたちについて 1994 年に出された有罪判決を繰り返したアンカラ治安法廷の決定の後、深い失望を感じている。
ヨーロッパ人権裁判所が 2001 年 7 月に行った決定を受けて行われたこの審理は、トルコにおける最近 2 年間の重要な政治改革によってもたらされたものであ

---

35 *Milliyet*,22/04/2004

36 *Milliyet*,21/04/2004

37 *Milliyet*,22/04/2004

る。

この裁判と、裁判で下された決定はトルコ政府が約束し、トルコと EU の間の近しい関係がより発展する土台となった改革のプロセスからは明らかにかけ離れている[38]。

と話している。

これによって、トルコがコペンハーゲン基準を満たすために行っている改革に対して疑問府がつけられた。2004 年 12 月末に EU 加盟交渉を始められるか始められないか、レイラ・ザナに関する裁判がこの決定に大きくかかわることをはっきりと示された。つまり、トルコが交渉開始の条件を満たすにはレイラ・ザナを解放しなければならない、という要求を受けたことになる。こうしてレイラ・ザナ解放はトルコの EU 加盟交渉開始の条件となった。
ではこれを受けてその後、トルコはどのように動いたのだろうか。

4 月 22 日外務省が行った会見で、

すべての審理は透明な状態で、世論に開かれた状態で行われた。結果として、自由な司法は、彼らの手にゆだねられたものを評価して決定を下した。
この決定に控訴する裁判への道は開かれている。事実、被告たちが控訴申請したことが伝えられている。その後、ヨーロッパ人権裁判所へ訴えることもできる。つまり判決はより上の段階にある組織によって評価されるだろう。
これらの施行へ反対意見があることは確かだ。この改革で AIHM の決定において再審されたことに関して法的整備も行われ、申請があれば再び判決に関する裁判を続けていく[39]。

と発表している。ここでは、最高裁判所の決定に含みを持たせつつも治安法廷の裁判に問題がなかったと考えていることがわかる。

しかし 5 月以降、EU からの度重なる要求に対して、トルコでは次第にレイラ・ザナを解放しようとする動きの高まりを見られるようになる。
5 月 5 日には、コラムニスト M.Aşık 氏が次のように書いている。

**Hükümet imam hatiplerin önünü açarken ortaokul ve liselere de seçmeli din dersi getiriyormuş. Kağıt üstünde Kopenhag kriterleri, uygulamada Tahran kriterleri…**

---

[38] *Milliyet*,23/04/2004

[39] *Milliyet*,22/04/2004

書類上ではコペンハーゲン・クライテリア、施行するのはテヘラン・クライテリア

これは、AKP の高等教育評議会法改正法案が国家中枢にイスラム神学校(イマーム・ハティップ)の卒業生を導く手段であるとして政府のイスラムへ傾斜した政策と、レイラ・ザナ解放を拒否することによって EU 加盟を遠ざけていることを非難したものだ。

> **İlginçtir... Leyla Zana mahkemeye kelepçe ile getiriliyor. Bursa'da yakalanan El Kaide militanları savcılığa kelepçesiz götürülüyor...**
> 注目すべきことだ・・・レイラ・ザナが法廷に手錠をされて連れてこられている一方、ブルサで捕まったアルカイダの兵士は検察局へ手錠なしで連れてこられている・・・[40]

これも、EU から人権を侵害されている平和主義者と見られているレイラ・ザナが、テロ組織の兵士よりも犯罪者らしく扱われていることに対する非難だ。レイラ・ザナたちの審理が行われるたびに手錠でつながれた彼らの写真が載る。欧米のメディアでも同様であり、これはトルコの印象を非常に悪くしていることを懸念したものでもある。

このような、EU の強い要求にもかかわらず政府がレイラ・ザナ解放に動かないことへの世論の苛立ちが見られるようになる。5 月中旬にはブリュッセルでトルコ—EU 共同理事会が開かれたが、ここでも再びレイラ・ザナの問題が取り上げられたことを受けて、外務大臣ギュルは次のように発言している。

> われわれもザナを解放してこの問題が終われば、そしてトルコがこの問題から解放されればいいのに。と考えている。
> 最近の憲法改正[41]でわれわれは問題の敷居を越えた。すでに(EU の)扉の前まで来ている。
> これはトルコの将来であり、EU 加盟に傷をつける行為は許されない
> レイラ・ザナ裁判のほかは、欧州議会において 1.5 年間の間トルコに反する決定がとられるような出来事は起こらなかった[42]。

ここへきてレイラ・ザナが未だに刑務所にいるということが、トルコの EU 加盟交渉開始に当たって解決しなければならない最後の問題であることが明らかになった。そして 5 月 31 日に行

---

40 *Milliyet,*05/05/2004

41 トルコは 1 月 9 日、ヨーロッパ人権条約 13 議定書に調印し、戦時を含めて死刑を全面的に廃止している。司法面で EU 基準に合わせるための大幅な改革が進められているということ。

42 *Milliyet*、25/05/2004

われたエルドアン首相とイギリスの法務大臣との会談でも、トルコはレイラ・ザナについて次のようなメッセージを受け取った。

> トルコの EU 加盟交渉における努力を評価している。実行すれば、トルコを支持する国を力づけるような事柄もある。例えばレイラ・ザナの開放は重要な一歩になるだろう。このおかげで EU に重要なメッセージを伝えることができるはずだ[43]。

トルコはレイラ・ザナの解放を迫られ続け、はっきりとした形で問題はEU加盟交渉開始の障害となった。そして6月、レイラ・ザナは解放されることになる。まず2004年6月8日に最高裁判所は、裁判のやり方に問題があったとして、先の治安法廷の判決を翻した。そして、レイラ・ザナたちは解放された。

以上のようにレイラ・ザナが解放されるまでの経過を追ってきた。この章では、彼女が EU 加盟プロセスにおいて交渉開始の条件とされ、トルコが次第に追い詰められていく様子が見える。トルコがクルド人の存在を声高に主張する人物を、政治的判断によりやむなく解放したことがわかる。同時にヨーロッパにとっては、彼女がトルコにおけるクルド人の抵抗と、自身の基準から見たトルコの人権問題を象徴するものであったことを確認した。

## 第４章　レイラ・ザナ解放—トルコの見方—

前章ではレイラ・ザナが解放に至る経緯とともに、ヨーロッパにおいて彼女がトルコのクルド人の抵抗を代表する、平和と民主主義の象徴であることがわかった。この章では、解放後の新聞記事などから、トルコ側は現在彼女についてどのような見方をしているのか明らかにしていきたい。

ヨーロッパではレイラ・ザナは、クルド問題の平和的解決を目指す人権擁護家であり、トルコのクルド人抑圧政策の被害者と考えられている。彼女は民主主義のために戦うヒロインであり、その名前は‘平和’と‘民主主義’という単語とともにしばしば登場する。一方トルコでレイラ・ザナの名前が出てくるとき、それは PKK のリーダー、オジャランの名前と並ぶことが少なくない。
そもそも彼女はPKKのメンバーであるという罪で刑務所に送られたことを考えれば、PKKと共に新聞紙上に出てくることは不思議ではないかもしれない。実際トルコでは、現在彼女はどのように考えられているのか、クルド人のアイデンティティーを訴え続ける人物はどのように扱われるのか。

---

43 *Milliyet*、31/05/2004

### 1　政府関係者の反応

まず2004年6月、レイラ・ザナが解放された日にトルコ政府はどのような反応を示したのか、いくつか関係者の発言を見てみる。

6月9日大統領アフメット・ネジデット・セゼル

法廷の判決はこれなのだ。私が（他に）何を言うことがあろうか？

6月9日チチェッキ法務大臣

トルコの司法はやるべきことをやった。次は他の人たち（EU）の番だ。
この決定から間違った結果を出してはならない。また、すべての人は生まれや、住んでいるところがどこであれ、国家の平和と発展と民主主義がより永続的な状態になるために、責任を感じていれば、トルコは非常に短期間で民主的な、世界的にも優れた状態になるだろう。

6月9日ディヤルバクル市長オスマン・バイデミル

解放の判決は、不当な扱いを撤廃した。これはトルコ国内の社会的平和のプロセスへの助けとなるだろう。トルコが過去と向かい合うこと、いくつかの不足点を認めること、そしてこの償いを行うことのプロセスが始まった。すべての側面から、我々はポジティブなプロセスの始まりにいると考えている。

6月9日 CHP ケマル・アナドール

この判決を歓迎する。喜ばしいものだ。トルコの民主化という点から、またこれほどの年数を刑務所で過ごした国会議員が、遅いとはいえ自由になったという点からも、この決定は我々にとって喜ばしいものである。（この判決を“重要な発展”と特徴付けた。）

6月9日 CHP 副党首でありエスキシェヒル県知事のジェヴデット・セルヴィ

この判決は国家の平和を力づける助けとなるだろう。決定が、過去の苦しみを繰り返さないための助けとなるだろうということを信じている[44]。

6月10日エルドアン首相

我々の願いは、国家の平和へ影を落とす要素を、この前進によって撤廃することだ。地域的な分離はありえない。トルコ共和国の民族構成要素が、この決定を

---

[44] *Milliyet*,10/06/2004

分離主義として利用することもあってはならない[45]。

以上に見てきたように決定のあった 6 月 9 日、翌日 10 日のトルコの新聞は関連した記事が多く出ている。上のように、多くは解放を民主化へ向けた前進とコメントしている。しかしエルドアン首相や、チチェッキ法務大臣などは'間違いを起こしてはいけない'という注意を含めることを怠っていない。レイラ・ザナの裁判はまだ終わっておらず、今後は解放された状態で審理が進行していくことも考えれば、政府は今後も彼女の行動に対して警戒を続けるだろうということはこの時点での発言にも現れている。

6 月 11 日には、レイラ・ザナたち解放された元 DEP 議員たちと、ギュル外務大臣兼首相代行とが 45 分間の会談を行っている。ギュル外務大臣はレイラ・ザナたちを'元トルコ大国民議会のメンバー'として迎えた。ここでザナたちは

社会的平和と同胞意識を基礎としなければならない。われわれはトルコが EU に加盟するため、できる限りの努力を示すつもりである。

という平和のメッセージを繰り返した。これに対してギュル外務大臣は、トルコが新しい時代に入ったこと、改革が行われていることを強調している[46]。

6 月 12 日は、DEHAP（Demokratik Halk Partisi）[47]がエルドアン首相に、レイラ・ザナ解放などのクルド問題における改革を継続するよう呼びかけ、一方で PKK に対しては休戦を継続するように呼びかける書簡を送った。

6 月 13 日、レイラ・ザナは地元ディヤルバクルで DEHAP 党首とともに集会を行った。ここで、彼女はテロ活動を続ける PKK に対して"少なくとも向こう 6 ヶ月間の休戦の継続[48]"を呼びかけている。

この発言に対して、政府からは次々に反発が起きた。エルドアン首相は、

"（われわれが）行った改革が理解されていなかったとしたら、残念だ。[49]"

と述べ、法務大臣ジェミル・チチェッキは、14 日の Milliyet 紙との対談で次のように述べている。

解放の判決はよく評価されなければならない。最高裁判所の関係部局は、法

---

45 レイラ・ザナは解放された状態で現在も裁判を続けられている。

46 *Milliyet*、11/06/2004

47 1994 年に DEP が閉鎖され、現在のクルド系後継政党は DEHAP。

48 PKK-KONGRA は 6 月 1 日休戦撤回とテロ活動の再開を宣言した。*Milliyet,*29/05/2004

49 *Milliyet*、12/06/2004

的、歴史的決定を行った。これが悪用されてはならない。国家の一体性、国民の共生、ともに歩むことを基礎として行動しなければならない。
――休戦とはどのような意味か？休戦とは2国間において起こるものだ。2つの国家が存在するとでもいうのか？これらは間違った表現である。この観念がどんな意義を持つのか、法律上どのような位置にある表現なのか理解して話す必要がある。このような発言は、以前の古い考え方が変わっていないことの象徴だ[50]。

また、同じくディヤルバクルでの集会で DEHAP 党首が、PKK と政府の仲介を行う'調停者'としての存在感を強調するため、"われわれは政府からも、PKK からも同じ距離にたっている"と発言したこと対しても、

国家と組織に対して同じ距離にあるとはどういう意味なのか？これはどのような見解か。合法な政党政府と違法テロ組織とを同列に扱うということがありえるのか？認められない。EU やアメリカがテロ組織と認めた団体[51]と政府を同じ位置にあると考えるとはどのような意味なのか。

と話している。解放後にレイラ・ザナたちが行った南東部ツアーはこのように、法務大臣チチェッキの激しい反発にあった。
またレイラ・ザナたちのこの発言に対して、AKP の中の'民族主義的な'何人かの議員たちが、不満をこめた声明を発表している。

テロ組織の言葉によれば Political Wing とされるところの 4 人の議員（レイラ・ザナたち元 DEP 議員）は解放されてから民主主義と自由のマスクをかぶり、分離活動を彼らの言葉で'頓挫したところから再開する'と明らかにしている。
EU の目標はもちろん大切だ。しかしどのような目標であれ、われわれの国家の統一性より重要であるということはない。彼らは民主化の流れを利用して、過去から何も学ばず国家を裏切り、国家の一体性を壊すような事柄を恥じることなく発言し、罪を犯そうとしている[52]。

これは、クルド問題の民主化を進めるエルドアン首相に対する遠まわしな非難でもある。レイ

---

[50] *Milliyet*,15/06/2004

[51] 51.EUのテロ組織リスト Council of European Union 2581st Council Meeting Press Release[http://ue.eu.int/ueDocs/cms_Data/docs/pressdata/en/gena/80497.pdf]

[52] *Milliyet*,15/06/2004

ラ・ザナたちの活動は“民主主義と自由のマスクをかぶり、分離主義を行う”ことだと言う。彼らは国家の裏切り者だと言われている。これほど露骨な表現ではないが、政府関係者からも‘分離’を警戒した発言が相次いでいる。6 月 18 日には TRT のザザ語放送のニュースで、“われわれは PKK からも政府からも同じ距離にいる”という DEHAP 党首の発言に対して、“非合法組織と合法な政府を混同しないように”と反発を示した[53]。PKK に代表される分離主義を支持することは許されないということを、当事者であるクルド人に直接警告している。また、6 月 21 日には法務大臣チチェッキは CNN テュルクで改めてレイラ・ザナたちに次のように忠告している。

> 彼らはトルコの忍耐を試すようなことをするべきではない。解放は‘民主的後悔’になる可能性がある。現在、政府には杖（強硬手段に訴える可能性）も、民主的可能性もある。杖を望まないなら与えられた可能性をうまく使うことだ。
> 彼らは民主主義を叫ぶ一方、テロを批判することには口ごもっている。‘われわれは調停者だ’といっているが、誰が彼らにこの役を与えるのだろうか[54]？

このよう話し、レイラ・ザナたちが PKK によって行われるテロを率先して批判しなければならない立場にあると述べ、クルド人アイデンティティーに関する発言を控えなければ強硬手段に訴える可能性もあるということを示唆している。レイラ・ザナたちの解放以降、政府は一貫してこのようにコメントし、注意を向け警戒している。関係者の発言からは未だクルド人による“分離”の影に怯えるトルコ政府の姿が浮かび上がる。

### 2　コラムに見るトルコの意見

一方この時期 Milliyet 紙のコラムに目をむけてみると、様々な意見を見ることができる。6 月 13 日のレイラ・ザナの‘6 ヶ月休戦延長’発言は数日間、盛んにコラムのテーマにされた。6 月 14 日は D.Sazak 氏がレイラ・ザナを PKK とは区別し、彼女の平和へのメッセージの方に注目しているのに対し、同日 T.Akyol 氏は彼女が停戦を呼びかける際、‘6 ヶ月’と期間を設けたことを警戒している。F.Bila 氏は 6 月 13 日、16 日のコラムで元々クルド語解禁などは PKK の要求であったこと、クルド人たちの要求が今回で終わらないだろうということを指摘した。同時に次に来る要求としてオジャランへの恩赦や、選挙比率の引き下げ[55]などを予想しこれに政

---

[53] Milliyet,19/06/2004

[54] Milliyet,21/06/2004

[55] 有票数の10％を超えない政党は議員を国会へ送れない。Milletvekili Seçimi Kanunu、33条。

府がどう対応するのか注目している。また、H.Pulur 氏の DEHAP 党首の発言は‘首相とİmralı にいる男、オジャラン[56]を同列に扱うことになる、というような批判も見られた。

このような様々な意見に、レイラ・ザナに対するトルコの複雑な反応を見ることができる。平和へのメッセージに対する期待、クルド人アイデンティティーへの警戒、オジャランとの関係など議論は多種多様である。

コラムを通してトルコの反応を対照的な二つの意見に分けると、F.Bila 氏の 6 月 19 日の記事と、D.Sazak 氏の 6 月21日の記事に代表されているように見える。ではまず F.Bila 氏の 6 月 19 日のコラムに注目してみる。ここでは CHP 党首バイカルの談話が紹介されている。

> 彼ら（レイラ・ザナたち元DEP議員）の行動の裏には何があるのか？彼らは何をしようとしているのか？私の印象によると、彼らの頭にある考えは憲法を変更すること、トルコ共和国が二つの民族から構成されると憲法に記載することだ。トルコがトルコ人とクルド人という民族から成り立つと彼らは憲法に書きたがっているが、この考えは一番大きな間違いだ。このようなことはあってはならない。これはトルコ共和国を分散し、破壊し、根底から揺さぶるという意味になる。トルコを民族によって分離すること、分かつことは不可能だ。そのときはほかの民族出身の国民はどうするのか？差別に不満を示すだろう。憲法に民族のリストでも載せるのか？トルコを二層構造にすること、これを憲法に記載することを彼らが考えているとすればー考えていると理解してー次のことを言いたい。‘このようなことは考えることすら許されない。
>
> ザナたちが解放された後の発言を見ている。武力闘争をほのめかし、脅迫するようなメッセージを放っている。このようなことをするのは大きな間違いだ。トルコはテロを恐れたからではなく、逆にテロをなくすために今回の改革を行ったのだ。この決定は政府の一部が決めたことではなく、より広い層が参加している。彼らは理解を見せた。これには多くの犠牲を出したトルコ軍も含む。この観点から、武力による脅迫をすることは大きな間違いだ。
>
> トルコの踏み出した歩みが間違いだったのなら残念に思う。脅迫を行い、頭にある考えの実現を考えることは間違いだ。態度と発言をこれにより調整する必要がある。なされた決定に対して、踏み出された歩みに対して失望を感じさせないことが必要だ。
>
> 個人的に民族的アイデンティティーや文化的アイデンティティーとともに生きることは民主化という意味において、前進であると思う。しかし社会や政治を民族により分裂させること、それによって構成することは、民主的前進ではない。この違いをよく知ることが必要だ。民主的、統一的、世俗的トルコ共和国において統

---

[56] 勝又 郁子　『クルド・国なき民族のいま』　新評論　2001 年　pp.12-13（以下、勝又）

一の中でみなが文化的アイデンティティーを感じることが正しい道だ。CHP の見解はこれだ[57]。

次に 6 月 21 日の D.Sazak 氏のコラムを見てみる。

南東部で平和が永続的になるように、それぞれがやるべきことをやっているだろうか？ディヤルバクル市長オスマン・バイデミルは、週末にイスタンブルに来た。学者の集団と"クルド問題の民主的見解"について議論した。クルド語放送と元 DEP 議員解放の後の肯定的な空気を維持する方向で世論によりはっきりとしたメッセージを発することを考えている。知識人たちは、声明文を用意し、イスタンブルとディヤルバクルで発表する予定だ。

トルコの著名な芸術家や作家、科学者たちがこの声明に署名するだろう。EU 加盟交渉開始の前にトルコの民主化が武力によって影を落とされることへ反対することを考えている。

このように肯定的な努力がなされる一方、アンカラからは別の評価が届いている。19 日の CHP 党首バイカルの発言は注意を引くものだった。バイカルは元 DEP 議員たちが刑務所から出た後、外務大臣ギュルを訪問した後、同じ日に彼らを承認し、会談した政治家だ。その日に彼らが何を話したのかわれわれは知ることができない。しかし彼は次のように話している。

「彼ら（レイラ・ザナたち元 DEP 議員）の行動の裏には何があるのか？彼らは何をしようとしているのか？私の印象によると、彼らの頭にある考えは憲法を変更すること、トルコ共和国が二つの民族から構成されると憲法に記載することだ。トルコがトルコ人とクルド人という民族から成り立つと彼らは憲法に書きたがっているが、この考えは一番大きな間違いだ。このようなことはあってはならない。これはトルコ共和国を分散し、破壊し、根底から揺さぶるという意味になる。トルコを民族によって分離すること、分かつことは不可能だ。そのときはほかの民族出身の国民はどうするのか？差別に不満を示すだろう。憲法に民族のリストでも載せるのか？トルコを二層構造にすること、これを憲法に記載することを彼らが考えているとすれば－考えていると理解して－次のことを言いたい。'このようなことは考えることすら許されない。」

イラクの憲法のようにトルコで二つの民族を位置づけ、そのように憲法を改正することは認められない。しかしバイカルがこのように警告する一方、ザナたちがどこで、誰に向かってこのような計画を説明したのか明らかにする必要もあるのではないか？憲法改正への道は確定的だ。仮に元 DEP 議員たちがこのように

[57] *Milliyet*、19/06/2004

考えていたとしても、議会でこのような変更を誰が提案するのだろうか？AKP（Adalet ve Kalkınma Partisi）や CHP が支持するのだろうか？もしくは大統領セゼルか？トルコが 2004 年末に EU 加盟交渉を始めて、‘ヨーロッパ市民’への道を目標としているとき、誰が内部で、なぜ民族の分裂を考えるだろうか？分離というパラノイアからわれわれはいつ解放されるのだろう！？

上のコラムはトルコのレイラ・ザナに対する複雑な心情の中でも代表的な二つの意見を表している。レイラ・ザナたちの活動を“分離主義活動”と受け取る見方と、解放を民主化への肯定的な動きと捉える見方だ。EU 加盟を前にして、クルド問題はすでに黙殺することはできなくなっている。しかし一方でレイラ・ザナは、長くトルコが押さえ込んできたクルド人のアイデンティティーの代弁者だ。彼女の平和へのメッセージを肯定的に受け止め、擁護するのか。分離主義者として非難の対象にするのか。二つの対照的な意見はトルコの葛藤を表している。

## 終わりに

レイラ・ザナの解放は、2004 年 12 月 17 日の EU 首脳会議を視野に入れた政治的判断であった。12 月 17 日、同会議はトルコのEU加盟交渉開始で合意したことなどを盛り込んだ議長総括を採択して閉幕した。交渉開始の合意にレイラ・ザナの解放が大きく影響したことは間違いない。しかし、2005年10月3日からの交渉開始が明記されている一方「交渉の結果は保障できない」と述べ、交渉開始が加盟に直結しないことを指摘している。交渉過程でトルコが人権や自由、民主主義などEUの規範に違反した場合の交渉中止など厳しい条件もつけている。

EU がトルコに対して加盟を保障しないという留保をつけたことに注目したい。人権、民主主義など EU の規範に違反した場合の交渉中止がありえるということは、クルド問題、レイラ・ザナの問題が今後もトルコ－EU 間の議論の争点のひとつとなることを意味している。今後も彼女は交渉で駆け引きの対象となるということだ。この状況は過去にトルコに限らず、クルド人たちが諸外国の力を利用しようとして、逆に利用される歴史を繰り返してきたこと、大国間の思惑に翻弄されてきたこと[58]を思い出させる。

しかし、例えレイラ・ザナがトルコ－EU 間で双方から利用されることになるとしても、トルコで長くクルド人が「山岳トルコ人」としてその存在を口に出すことさえできなかった時代を考えれば現在の状況は大きく前進している。

本稿ではトルコのクルド人問題の象徴、レイラ・ザナに焦点を当て、彼女が解放された背景と、その後のトルコの反応を見てきた。彼女は‘分離主義者’になるのか、それとも‘平和的調停者’として認められるのか。現在、今後の交渉次第でどちらへも転じる可能性がある不安定な状

[58] 勝又、前掲書、ｐ.4

況にある。10 月に行われたレイラ・ザナへのサハロフ賞授与式で彼女はクルド人問題について次のように述べている。

“われわれの時代の解決策は、死ぬことや、殺すことではない。生きること、生かすことだ。”

この言葉どおり、流血を繰り返さずに問題が解決されることを願う。

## 参考文献


イスマイル・ベシクチ(著) 中川喜与志、高田郁子(編訳)『クルディスタン多国間植民地』 柘植書房 1994

S・C・ペレティエ(著) 前田 耕一(訳)『クルド民族－中東問題の動因－』 亜紀書房 1991

勝又 郁子『クルド・国なき民族のいま』 新評論 2001

中川 喜与志『クルド人とクルディスタン－拒絶される民族－』 南方新社 2001

Kemal Kirişçi－Gareth M. Winrow、*Kürt Sorunu Kökeni ve Girişimi,*Tarih Vakıfı Yurt Yayınları,İstanbul,1997

Koray Düzgören,"Türkiyenin Kürt sorunu",*Cumhuriyet Dönemi Türkiye Ansiklopedisi/ Yüzyıl Biterken Cilt 13*,İletişim Yayınlar,İstanbul,1995

Leyla Zana,*Writings from Prison*,Blue Crane Books,Cambridge,1999

Robert Olson tr,"Kurdish Nationalist Movement in the 1990s :Its Impact on Turkey and the Middle East", The University Press of Kentucky,Kentucky,1996

"Criminalizing parliamentary speech in Turkey / briefing by the International Human Rights Law Group ; before the Commission on Security and Cooperation in Europe.", *implementation of the Helsinki accords*, Washington DC : The Commission,1994

アメリカ下院 1994 年 5 月 1 日、ヨーロッパにおける安全保障と協力委員会(ヘルシンキ委員会)公聴会記録。マイクロフィルム。

Milliyet 紙

http://www.milliyet.com.tr/

ECHR（European Court of Human Rights）

http://cmiskp.echr.coe.int/

レイラ・ザナに関するインタビュー

http://www.chris-kutschera.com/A/leyla_zana.htm CHRIS KUTSCHERA 30 ANS DE RPORTAGE (Textes et Photos) 「TURKEY：Leyla Zana, the only Kurdish woman MP」

Amnesty International

http://www.amnesty.org/